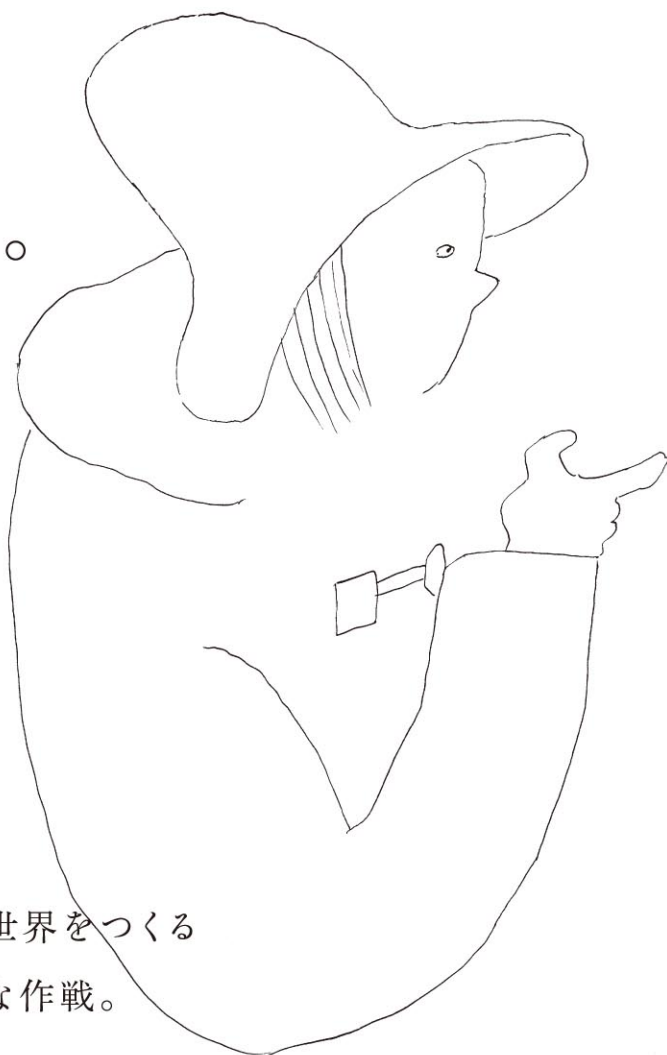


こっそり
ごっそり
まちを
かえよう。



このおおきな世界をつくる
ほんのちいさな作戦。

文 三浦丈典
絵 斉藤弥世

ブックデザイン 有山達也
岩渕恵子

まえがき

ちいさな作戦を立てるまえに

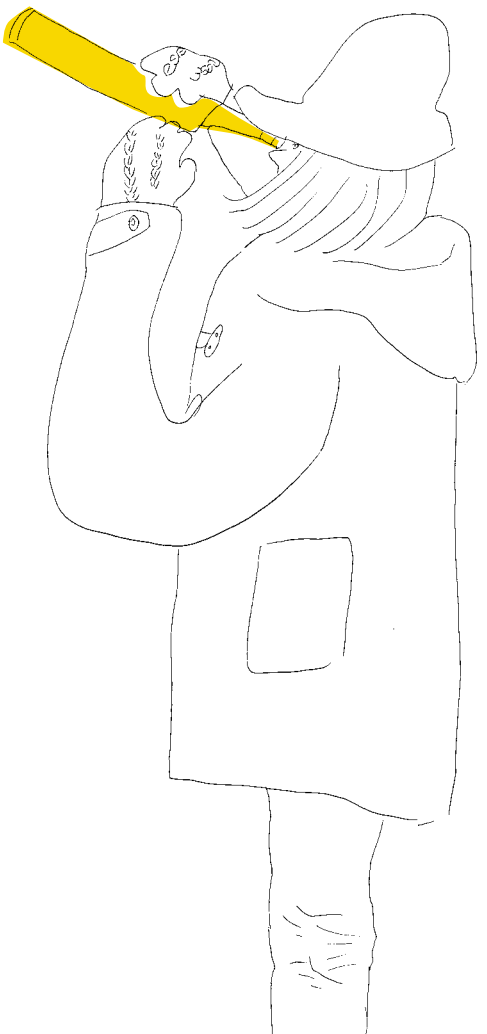
三浦丈典

先日、とある公共施設の方から相談を受けました。

車いす使用の職員を春からひとり採用することになったので、入口に生えている大きなけやきの木を切ってスロープをつけるのだけど、そのデザインを考えてほしい、とのことでした。

バリアフリーという考えは正しいと思うし、人生のさまざまな局面において、なるべく多くのチャンスや機会にめぐり合うことは素晴らしいと思う。けれども、たぶんぼくより年上のこの木を、まるで家具を動かすようにあっさり切ってしまうといいのか、瞬間的にためらいを感じました。シンボルのような木ではないし、すぐそばに同じような木も生えています。そこに生えていることで邪魔だとか掃除が面倒だとか、短所は指摘できたとしても、じゃあなにか長所があるのか、と聞かれてもうまく答えられない。でも漠然と切っ

てはいけないと思ってしまう。



そういった言葉にならない直感、ときに公平とは思えない本能のようなものは、論理的でも客観的でもないのです、たとえば会議とか規則とか、そういった議論ではまちがいがなく負けてしまいます。そしていま、ぼくたちの住むまちというのは、基本的にそういう考え方でつくられています。いつのまにか人間は置き去りにされて、そこで生活する人のためではない、なにか別の理由によって世界はどんどん塗り込められているように思うのです。人間よりも施設が先にあって、気配りというのはその形式さえあればいい、あとでなにか言われても説明がつく、という思考回路になってしまった。じぶんの内なる声、動物的勘

に鈍感であることのほうが、むしろ効率や要領がいい、と評価されるのです。

じぶんのまわりの環境を、近視眼的な発想と利那的な方法で、力まかせにコントロールするのではなく、創意工夫によって人間が合わせていくことのほうが、これからの未来はいきいきしたものになると確信しています。多少アバウトでもいいから、人間のわがまみやあいまいさをさりげなく許容していくような、そういったまちのほうが、どんなに官能的で刺激的でしょう。スロープをつける前提で検討するのではなくて、離れた場所で上手に仕事を進める方法とか、毎日だれかが押し上げてあげるような人間関係をつくるとか、あるいは道路にはみ出して、ほかの人もたのしく通れる坂道をつくるとか、そういったことにチャレンジしていくほうが、よっぽど人間らしいと思うのです。

この世界の規範をもう一度つくりなおすのは、むずかしいことのように思うかもしれませんが、でもこどものころを思い出せば、ぼくたちはいつも新しいあそびを始めるたびに、その都度新しいルールをつくって、果てしない世界と対峙してきました。そのときの向こう見ずな自由奔放さを取り戻せば、まだ見ぬ世界への入口は思いのほか近くにあることに気づき、勇気がでるはずです。

未来のまちをつくるのは、政治家とか投資家とか建築家ではなく、ごくあたりまえの感覚をもった、口下手で引っ込みじあんの、多くの普通のひとびとの念ずる力、そして日常の些細な行動だと思うのです。

- まえがき
3 作戦を立てる前に
三浦文典
- 10 じぶんのいえにあだ名をつけよう。
- 16 まちじゅうのお風呂が
水道管でつながっていることを
想像しながらお湯につかう。
- 20 となりのいえが空き家になったら
どうやってつかうか作戦を立ててみよう。
- 26 じぶんの部屋と教室が
すべり台でつながっていると
想像してみよう。
- 30 エスパールになったつもりで、
となりのいえの人がいまだこで
なにをしているか推理してみよう。
- 34 じぶんのいえに最高何人泊まれるか、
一度実験してみよう。
- 38 じぶんが王さまだったら
いえのまわりのどれくらいまでが
領土だったら都合がいいか考えてみよう。
- 42 ねこの額とうなぎの寝床のどっちが広いか、
議論してみよう。
- 48 じぶんと同い年のたてものをさがそう。
- 52 この1週間で
いえのなかに入ってきたものと
いえから出たものを
なるべく正確に書き出してみよう。
- 58 すぐく古くからありそうな
お祭りをでっちあげよう。
- 64 日本中のビルをぜんぶ横に倒して
1階建てだけの世界をつくろう。
- 68 超おきなお鍋でしかつくれない
新しい料理を発明しよう。
- 72 近所に住んでる人の顔を
なるべくたくさん思い出して
似顔絵を描いてみよう。
そのうち何人の名前を
知っているかたしかめよう。
- 76 となりのいえの窓から見える
じぶんのいえを想像してみよう。
- 82 じぶんのいえでお店を始めるとしたら
なに屋さんがいいか考えよう。
- 86 歩いていける場所がないものはなにか、
思いつくだけリストアップしてみよう。
- 92 1日何本の木を見たか、
かぞえながら生活してみよう。
- 96 電線を綱渡りして
あの子のいえまで行けるかたしかめてみよう。
- 102 自分がねこだったら
近所のどこで昼寝するか考えてみよう。
- 106 家の壁のなかでは水や電気やガスが
ぐるぐる流れていることを
想像しながら生活してみよう。
- 110 パジャマとサンダルでいえから
どこまで離れられるか挑戦しよう。

114 おとなとくるまが絶対に入れない
こどもだけの王国は

東京のどこにあるべきか、検討してみよう。

118 たてもののなかにいる人
全員の年齢を足してみよう。

124 まちのなかでお弁当をひろげて
食べたいと思う場所に印をつけておこう。

128 道路に面していない
古いいえを見つけて出して
秘密基地と名づけよう。

134 どれくらいのお畑があれば
一年中サラダが食べられるか
想像してみよう。

140 1年間で出勤時間が合わせて
どれくらいになるか計算してみよう。

172 ユニットバスの値段で

何回銭湯に行けるか計算してみよう。

178 日本中に地主が何人いるか当てっこしよう。

184 自分の部屋から
みちに出るまでの時間を計ってみよう。

188 まちじゅうの駐車場を
こどもの遊び場に戻そう。

192 今日1日に何人と話したか、
かぞえてから寝てみよう。

198 生ゴミで走る新しい乗りものの
ネーミングとかたちを考えておこう。

202 おじいさんになったら
一緒にくらしたい友だちに
いまのうちにお願いしてみよう。

144 じぶんのいえに
いまの倍の人数でくらすには

どうしたらよいか考えてみよう。

150 東京じゅうの人が全員参加できる
マラソン大会を企画してみよう。

154 いえに降った雨がどこを流れて
どこに行くか、つきとめてみよう。

160 照明デザイナーと
電気の消し方を相談しよう。

164 すこしのあいだだったら
人に貸してもいいものをまとめておこう。

168 オフィス街を歩きながら、
ここにじぶんの家を建てるとしたら
どんなふうにしたいか考えよう。

208 大冒険できる宝の地図をつくろう。

いつかじぶんのこどもや孫が

おおきくなったときに

一緒に住みたいまちをつくろう。

218 出典

220 おわりに

224 略歴



じぶんのいえに
あだ名をつけよう。

なんか
これるわ





スウェーデン
満足度……84.0%



アメリカ
満足度……74.9%



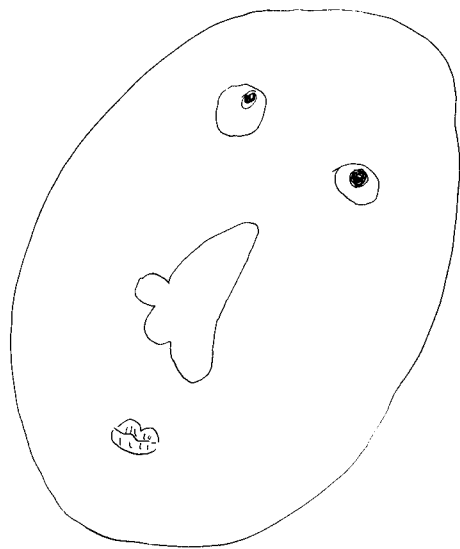
日本
満足度……33.3%

自分のいえに満足している
日本人は、3人に1人だけ

『住宅の満足度の国際比較(2010年)』

よく考えると、いえっておなじものなんてひとつもないのに、固有の呼び名がない。呼ぶ必要なんてないからいらないよ、という言い分ももちろんあると思うけど、「うち」と言ったとたんに、それぞれがもつ特技や特徴がぜんぶ置き去りにされて、一軒家だろうとマンションだろうと、実家だろうとひとりぐらしだろうと、そんなことは関係なくなってしまうのは、なんとなく乱暴というか、ひとつひとつの尊厳とアイデンティティをもうすこし尊重してもいいような気がする。

そういえば、不動産広告でもらえる物件の情報は基本的にふたつしかなくて、「〇〇駅徒歩〇分」ということと、「LDK」だけだよ。つまり、いえの価値はほとんどこのふたつで判断されるということ。言いかえると、それ以外の個性はあまり重要でないということ。それって試験の点数だけで人の価値を決めちゃうみたいで、おかしいと思うのです。経済至上主義のこの時代、がんばってもしょうがないところはコストがどんどん削られていくから、その結果味気ないたてものと、それによってできる平板なまち並みが増えていって、結果的にまち自体の価値は下がり、生活の舞台から活気がなくなっている。そうなるたたてもその価値も、もちろん下がっていくのです。ああ、おそろ



べし、負のスパイラル。

そういったことになんとか歯止めをかけねば！ といきり立ってみ

てもつまるところ、人びとみんなが、いえというものの価値を自由にとらえ、ひとりひとりが、自分なりの尺度で、よいものをきちんとよいと認め、だめなものはやんとだめと言えるおとなな文化をつくっていくしかない。たぶんこれにつきるよ。

まずは手始めに、いま、じぶんが住んでいるこのいえに、ぴったりなあだ名を考えてみたらどうだろう。あだ名というのは「あれ」とか「そこ」という指示語でもないし、本名ともちがう。それぞれの特徴をうつす社会的な表象なのです。あだ名をつけるというのは観察力や洞察力を要する、創造的な行いだから、よく観察して、ほかのいえにはない魅力はなにか、いいところやわるいところはどこか考えてみよう。いえのまわりにある特徴や、思い出深いエピソードがあったかもしれない。このたてものは人にたとえるとどんな感じなのか？ 男女どっちなんだろう？ 犬にたとえたらどんな種類なんだろう？ なにを食べて生きているんだろう？ なんでもいいです。

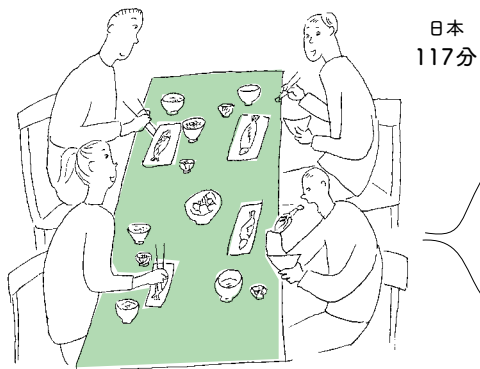
そうやって身のまわりの環境を、いま一度たのしく注意深く、ときに熱くときに冷静に、愛情をもって観察することが、じつはいいいえ、いいまちをつくっていく第一歩に思えるのです。



文化人類学者の石毛直道さんが推奨する「共食」という考えは、コミュニティの核として食事文化を再評価するという試み。食べものへの感謝の気持ちやつくっている人と食べている人の関係を育むばかりか、そこで生まれた「共食縁」が地産地消やまちおこしなどの地域の活性化や、少子高齢化など社会的な問題の解決策にもなりうるということ。ええと、つまりは「みんなで食べるごはんはおいしい」ということ。そうだよね、うんうん。

家族であろうと、恋人、友だち、同僚であろうと、一緒に食事をすれば生理的な行為以上の、いろいろなレベルでの「分かち合い」が起きる。ぼくは3人兄妹7人家族で育ったので、おかずの取り合いのないひとりっ子がうらやましいこともあったけど、いざひとりで食べるとなると、なんだかさみしいことも、こどもながらになんとなくわかっていた。分かち合うということは、

超おおきな
お鍋でしかつukれない
新しい料理を発明しよう。

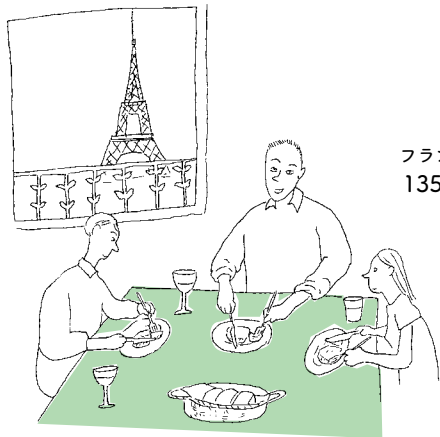


日本
117分

意外とのんびり
食事をしている
日本人



英国
85分



フランス
135分

『1日あたり平均食事時間の
国際比較(2006年)』

注：対象は「eating and drinking」。
調理時間は含まない

極にあるような気がして、建築家はいつもあこがれるのです。

取り分が減るということではなく、ひとりでは手に入らないものをみんなでたのしむということ。キャンプやお花見で、わいわい飲んだり食べたり、となりにいる知らない人たちともたのしくおすそ分けし合ったり、通り過ぎるおじさんに話しかけられたりすることを思い出すと、本来の人間の味覚というのは雑多で不純な環境のほうが、むしろ研ぎすまされるんじゃないかとすら思う。

平均世帯人数が減り、ワンルームマンションが増えた現在は、食事の孤独化がさらにどんどん進んでいるようだ。そういった習慣に違和感を感じなくなってしまう理由は、たとえばファストフードやお総菜が好きなきときに必要な量だけ買えて、しかもその材料やつくった人、そのほかそれにかかわるさまざまな雑音をあえて忘れるように、食事そのものが不愛想にパッケージされているからではないか。

建築家は、この由々しき現実にいざ立ち向かわん。いろいろな人が集まって食べることのできる魅力的な食堂空間をデザインし、みんなでたのしくくれるキッチンを發明して、会話がはずむとびきりのテーブルもほしいよね。そうなるとメニューも気になるなあ。料理は今日という日が1日しかないことを教えてくれるから、たてものと対